

小学校 社会

鱒ヶ沢築港の学習において地域の社会的事象に

進んで関わろうとする児童の育成

ー 単元構成の工夫と地域資源の活用を通してー

鱒ヶ沢町立西海小学校 教諭 倉内 貞行

要 旨

本研究は、第4学年「郷土の発展に尽くした先人の働き」の学習において、地域の歴史的な事象を自分のこととして思考できるという意味認識の段階への到達を図るため、認識の段階に応じた単元構成の工夫や、地域資源の活用の有効性について明らかにしたものである。意図的・計画的に地域資源を活用することで、未来の町づくりについて考える場では、共感を基に地域に対する誇りや愛情を示しながら、意味認識の段階に到達することができた。

キーワード：小学校 社会 地域教材 ランキング 事実認識・関係認識・意味認識

## I 主題設定の理由

平成20年1月に中央教育審議会が示した「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」（以下「中教審答申」という）には、小学校社会科の改善の具体的事項として「生活科の学習を踏まえ、児童の発達段階に応じて、地域社会や我が国の国土、歴史などに対する理解と愛情を深め、社会的な見方や考え方を養い、身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る」と示されている（2008）。

一方、これまでの自身の授業実践を振り返り、児童の学習のまとめや感想の記述を想起すると、自らが社会的な事象に対して主体的な態度で関わろうとする意欲があまり見られないという課題が見えてきた。

そこで、本研究では地域の発展に尽くした先人の働きについての学習と、現在児童が暮らしている町の課題をつなげた単元構成を行う。このことにより、先人の働きと自分が知っている町の姿を結び付け、当時の人々の願いや思いや成果を具体的に考えることが期待できる。また、そうした歴史の上に現在の自分たちの生活があるのだが、現在の町の産業には課題があるという事実にも気付くことができるであろう。地域のために尽くした先人の働きと町の現在の状況をつなげることで、未来を考える学習活動へとつながり、よりよい社会の形成者として社会的な事象に働きかけていく態度が育成されると考え、本研究の主題を設定した。

## II 研究目標

鱒ヶ沢築港の学習において、よりよい社会の形成者の一人として社会的な事象に働きかけていく態度を育成するために、児童の認識の段階に応じた単元構成の工夫とそれに伴った地域資源の意図的、計画的な活用が有効であることを実践を通して明らかにする。

## III 研究仮説

児童の認識の段階に応じた単元構成を工夫し、その中で、地域資源を意図的、計画的に活用していくことで、児童が地域の社会的な事象に対して、進んで関わろうとする態度が育成されるであろう。

## IV 研究の実際とその考察

### 1 「地域の社会的な事象に進んで関わろうとする児童」について

地域素材の教材化については、小原友行、澁谷隆行の先行研究を踏まえ、鱒ヶ沢町の築港に尽くした先人

の働きを教材化することの妥当性について、以下のように考えた。

- 児童にとって、自分自身の生活に近いことから、自己と関連付けて考えることができ、学習への興味・関心及び問題意識を喚起できる教材である。
- 身近な地域の社会的事象について具体的な調査・観察を行うため、実感を伴いながら知識を獲得することができる。このことは科学的な社会認識の基礎（知識・理解・認識する力）を育成することにつながる。
- 自己と関連付けて具体的に考えながら理解したり、自分も地域の一員として、社会的な事象について主体的に判断したりすることが可能である。つまり、公民的資質の基礎を育成することにつながる。

中教審答申では、小学校社会科の改善の具体的事項として、「（中略）社会的な見方や考え方を養い、身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視」することを示している。その際、特に第4学年では生活科の学習を踏まえ、社会的な事象に自分自身を関わらせながら学習する態度を育成していくことが大切であると考えている。また、歴史的な内容を初めて学習することを踏まえ、先人の思いや努力があり、その上に我々の生活があるということを理解できるようにし、地域社会に対する誇りや愛情を育てていくことも重要であると考えた。

以上のことから、本研究における「地域の社会的な事象に進んで関わろうとする児童」として、以下のように定義することとした。

- ① 先人の思いや願い、苦労や努力に対して共感しようとする。
- ② 先人の努力やその成果と現在の町とを比較したり、関連付けたりしながら地域社会に対する誇りや愛情を示し、表現しようとする。
- ③ 先人の努力やその成果と現在の町とを比較したり、関連付けたりしながら地域社会に対して自分なりの願いをもとうとする。
- ④ 他者との考えの交流を通して、町の未来について考えを広げたり、深めたりしようとする。

## 2 研究仮説について

### (1) 認識の段階に応じた単元構成の工夫

宮原武夫は著書において、「歴史学習は、段階的に、事実認識、関係認識、意味認識に到達させ、生活感情や常識を発達させる」（1998）ことが重要であると述べている。そこで、児童の実態を踏まえながら意味認識の段階への到達を図るために、認識の段階に応じた単元構成をし、スモールステップで児童の認識の段階を着実に高めることが効果的であろうと考えた。各認識の段階における目標を以下のように設定した。

- ① 事実認識：先人の努力や苦労、思いや願いなど地域の歴史的事象について事実を理解する。
- ② 関係認識：先人の努力や苦労の成果と現在の町の状況とを比較・関連付けし、先人の努力と現在の町の状況の関係を理解する。
- ③ 意味認識：先人の努力や苦労を踏まえながら、地域の歴史的事象を自分なりに意味付けし、自らも町民として未来を思考する。

意味認識の段階への到達を図るために、単元の終末に、未来の町づくりを考える場を設定した。この手立てにより、以下の効果が期待される。

- 郷土の発展に尽くした先人や現在の町で工夫や努力を続けている人々と同じ視点に立ち、歴史的な事柄や現在の町の人々と自らを結び付けて考える、意味認識の段階への到達が期待できる。
- 既習事項を丁寧に振り返ることになる。

本研究では、未来の町づくりについて考える活動として「ランキング」を行うこととした。「ランキング」とは、江間史明が著書の中で紹介している児童同士が対話する活動である。活動は、①自分なりの根拠付けをして選択肢を順位付け→②同じ意見同士の交流→③違う意見との交流→④再ランキング→⑤振り返り、という流れで行う。

ランキングのよさは、順位を付ける過程で、どの児童も自分なりに根拠を考えることができることにある。自分の立場を明らかにし、交流に参加するため、それぞれが、これまでの学習を振り返ることができる。また、それぞれの考えを認め合える活動である。ランキングを通して児童一人一人が自信をもち、地域の発展に尽くした先人の思いや現在の町の人々の思いや願いと自らとを結び付けることで、地域に対して誇りや愛情をもち、地域住民の一人としての自覚をもつことへつながると考えた。さらに、交流を行っていくと、自分の考えとは異なる考えと出会うことになる。その異なる考えとの出会いによっていろいろな価値観に触れ、自分の考えを広げることが期待できる。

以上のように、「ランキング」という活動を、意味認識を図る段階で行うことで、次のことが期待できる。まず、未来の町づくりについての意志決定を通して、地域の歴史的事象について自分自身を関わらせた思考ができるようになること及び地域に対する誇りや愛情を深めることが期待できる。また、交流活動においては、価値観の相違点や共通点の発見から、意味認識の広がりが期待できる。

(2) 「地域資源を有効に活用する」について

ア 地域人材の導入について

地域の人材を活用し、より専門的な内容に触れられるようにすることで、児童が共感を伴って学習に取り組んだり、昔の人々の思いや願いを踏まえながら自分なりの考えをもったりすることができる。また、地域素材を教材化するに当たって、地域の社会的事象に精通し、学習に関する情報や資料の提供も可能な地域人材に、教材開発の段階から協力を要請することとした。地域の歴史的事象と現在の町の産業が繋がっていることを伝えられる人材として、以下の人物に協力を要請した。

- 町教育委員会学芸員…地域の歴史的事象について資料提供や現地学習の補足説明
- 鱒ヶ沢漁業協同組合…鱒ヶ沢町の漁業の取組や課題についての説明
- 鱒ヶ沢道路河川事業所…七里長浜港の築港の背景や活用状況についての説明

イ 現地学習を行うことについて

現地学習で期待される効果は以下の2点である。

- 実際に築港工事に関わりのある場所を見学し、説明を受けることで、工事の規模を体感したり、工事に携わった人の思いや苦労を想像しながら具体的に事実を認識したり、当時の町民の思いに共感することができる。
- 身近な場所に見学に行くことによって、普段見慣れていたところにも、町民の思いや願い・努力があったということを理解し、先人がつくり上げた町に自分たちは現在生活しているということから、現在の鱒ヶ沢町を過去との関係から考えるという関係認識の段階に到達することが期待できる。そこで、単元構成上、児童の生活感情や常識の発達ができる以下の場面で現地学習の時間を設定することとした。
  - ・ 児童の問題意識を喚起するため、単元導入段階での漁港の見学
  - ・ 漁港の埋め立て工事のために切り崩された学区内の山や土砂を運んだルートの見学、当時の写真と現在の町の様子を比較する場面の設定
  - ・ 七里長浜港の施設見学、管理者の説明、取材

2 検証授業の実際

(1) 単元名「港の町 鱒ヶ沢」

(2) 指導計画（全13時間）

時	認識の段階	学習のねらい
1	事実認識	鱒ヶ沢漁港の見学を通して漁港の施設や規模を実感し、漁港整備について学習課題をもつことができる。
2		見学したことを基に、鱒ヶ沢漁港について疑問に思ったことや知りたいことを出し合い、学習計画を立てる。
3		なぜ、鱒ヶ沢漁港の整備が必要だったのか、当時の資料を基に、住民の願いを受けて、漁港が作られたことを理解できる。
4		資料から工事の規模、先人の努力や苦労について理解することができる。
5.6		現地学習を行い、築港工事に活用された学区内の山を見学し、工事の規模を体感し、当時の人々の苦労や努力の成果を知ることができる。
7		七里長浜港見学を通して、鱒ヶ沢漁港と比較しながら、設備や構造物の共通点、相違点に気付き、七里長浜港について学習課題をもつことができる。
8		見学したことを基に、七里長浜港について疑問に思ったことや知りたいことを出し合い、学習計画を立てる。
9		七里長浜港は町のみならず、津軽地方の産業振興のために作られたことを資料から読み取り、当時の町の人々の思いや願いを理解することができる。
10	関係認識	鱒ヶ沢町の漁業の現状について漁業関係者の方から聞き、現在の鱒ヶ沢町の漁業には、課題があるということに気付くことができる。
11		交易港としての七里長浜港の活用の様子を八戸港と比較しながら、読み取り、七里長浜港の現状と課題を理解することができる。
12	意味認識	鱒ヶ沢町と港の関係について学習したことを振り返る。
13		鱒ヶ沢町は今後、港をどのように活用すべきかについてランキングを行い、鱒ヶ沢町と港の未来について、鱒ヶ沢町民として意見を交流し合い、自分のこととして考えることができる。

### 3 仮説の検証と考察

#### (1) 事実認識、関係認識を図るための地域素材の活用の効果

事実認識及び関係認識の段階において、地域素材を活用したことにより、先人の努力や思い及び現在の町の人々の思いに共感することができたかを明らかにするため、学習後の感想文の分析を行った。その結果、図1のように19名中16名の児童に事実認識について共感を伴った記述が見られた。代表的な児童の記述例は次のとおりであった。

「貧しくなった町を漁業でまた、栄えさせようとした町民や菊谷亀吉さんが、がんばってくれて、すごいなと思いました。」「町民が協力して町をよくしたい、とがんばったのが目に見えてきそうで、なんだかうれしくなった。」

以上のことから歴史的な内容について初めて学習した児童でも、地域資源として、当時の資料の活用や、ゲストティーチャーの説明、現地学習を通して、具体的に地域の歴史的事象について理解することができ、その時代に生きた先人の思いや努力に対して共感を伴いながら事実認識の段階に到達することができたということが出来る。

図2は、関係認識の段階で、先人の思いと現在の町を結び付けて考える学習後の感想文で、共感を伴う記述が見られるかを分析・集計したものである。ここでは、「町の願いをたくされた漁港の人は今も努力を重ねていて、町の誇りだな、と思いました。」のように共感を伴いながら関係認識に関する記述をした児童は20名中13名であった。また、「漁業はがんばっているけどねだんの上下があるから大変だ。ねだんの上下を小さくできれば、もっと漁業は発展するだろうな。」のように、現在の漁業のみに共感を示した事実認識について記述し、関係認識の段階に到達できなかった児童は20名中6名であった。これは、検証場面での漁業従事者へのインタビューが現在の漁業を中心に展開され、それに伴って児童の意識が事実認識の方向へ働いてしまったことが原因として考えられる。

以上のことから、過去と現在を結び付けて考えるという目標に関して児童自身に意識させることで、関係認識の段階に到達する児童がより増えるのではないかと考えられる。

#### (2) 意味認識を図るための未来の町づくりについて考える場の設定の効果

図3は、未来の町づくりについて考える場として設定した「ランキング」において、友達の意見と比較したり関連付けたりすることができたか、授業後の感想文の記述を分析・集計したものである。その結果、19名中17名の児童に友達の意見と比較したり、関連付けたりした記述が見られた。また、友達の意見との比較から新しい視点に気付く児童も見られた。児童の記述例は次のとおりである。

「Aさんの意見を聞いて、七里長浜港もいいな、と思ったけど、昔の町の人々の漁港に対する願いをむだにしたいと思いました。」「はじめは、漁業しかないと思っていました。でも、話を聞いてみて、Bさんの意見が一番よくわかりました。話を聞くと、七里長浜港の方が大事なかもしれない、と考えるようになりました。」

図4は、「ランキング」を通して、学習した内容を踏まえ、自分なりに未来の町づくりに願いをもつことができたかを授業後の振り返りカードの記述を基に分析・集計したものである。その結果、19名中15名の児童の記述に自分なりの願いをもった記述が見られた。児童の記述例は次のとおりである。

「菊谷亀吉さんが鱈ヶ沢町をよくしたいと思って、国と

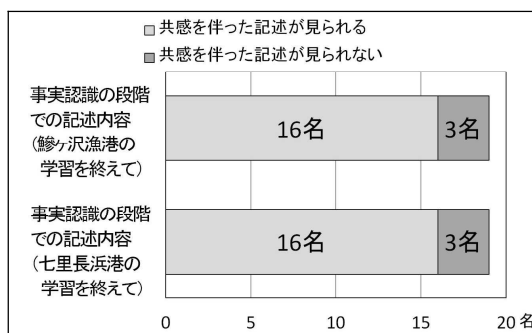


図1 事実認識の段階における感想文の分析

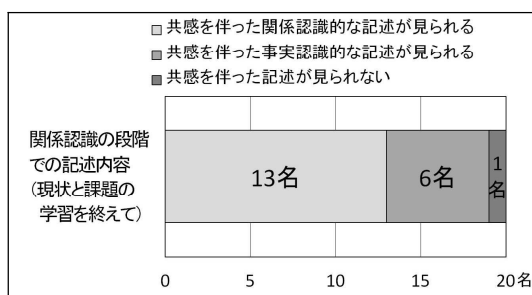


図2 関係認識の段階における感想文の分析

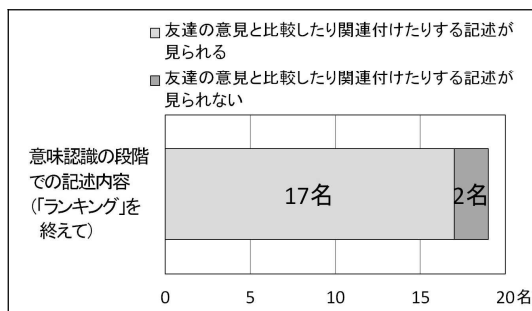


図3 「ランキング」で友達の意見と比較・関連付けした記述が見られるか

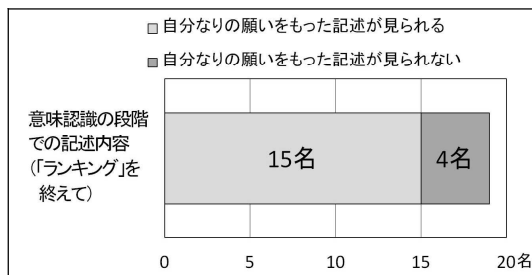


図4 「ランキング」で自分なりの願いをもつことができたか

話し合ったりしてくれて、住民も漁業がないと困ると言っていました。私も漁業がなくなると困ると思いました。」

また、前述の関係認識の段階に到達できなかった児童も、順位付けの際に過去と現在を結び付けながら理由を考えていたことがワークシートの記述から明らかとなった。つまり、「ランキング」は、先人の努力と現在や未来の町を結び付けて捉えさせる関係認識を図る上でも有効に働いた、ということが言える。

こうした分析から、未来の町づくりについて考える場でランキングを行うことは、これまでの学習を振り返る契機となり、再度、地域の人々の思いや願いに共感をさせることができる。また、交流活動では異なる意見を比較することによって、新たな考えに気付いたり、見落としてきたことを思い出させるなどして、考えを広げたり深めたりすることができる。つまり、未来の町づくりについて考える場の設定は、過去と現在の人々の思いに意味付けをし、自分自身と結び付けて思考する意味認識の段階への到達には有効であるということが明らかとなった。

### (3) 単元を通しての児童の変容について

#### ア 抽出児童の分析

表1は「ランキング」における意見の変化と事前の学習における共感を伴った理解に相関関係が見られるかについて分析・集計したものである。その結果、「ランキング」において、漁港と七里長浜港のどちらを選ぶかは両者に対してどれだけ共感的な理解ができたかということに関連していることがわかる。

以上のことから、人々の思いに意味付けをし、自分自身と結び付け思考する意味認識の段階で、確固とした意見をもてるようになるためには、地域について的事实・関係認識の段階の学習で、共感を伴った理解が必要であるということが明らかとなった。また、漁港及び七里長浜港の学習において共感を伴った理解ができなかった児童は、最初の順位付けにおいて自分の意見を決められなかったが、交流活動で、友達が主張した共感を伴った根拠付けから、共感という視点に気付き、意見を定めることができた。つまり、共感を伴っていなかったために意味認識の段階に到達できていなかった児童にとって、未来の町づくりについて考える場としての「ランキング」は、友達との交流を通して共感という視点に気付かせ、意味認識を促す上で有効な手だてである、ということが明らかとなった。

意識調査の分析

単元の学習を通して、児童の鰯ヶ沢町に対する意識がどのように変容しているかを明らかにするためアンケートを実施した。鰯ヶ沢町と海の関係は深いと思うかという設問に対して、「深い」と答えた児童の理由として、学習前は「北前船が来ていたから。」「埋め立てをしたと聞いたことがあるから。」などの断片的な記述や「海が近いから。」など、あやふやな記述にとどまる傾向が見られた。一方、学習後には「北前船や漁業、七里長浜港を活用しながら鰯ヶ沢町は発展しようとしているから。」など既習事項を踏まえた記述が25%の児童に見られた。さらに、75%の児童は「鰯ヶ沢町では、町民が海と生きていこうと決めて、ここまで来たから。」のように町民が海に抱き続けた願いに共感した記述が見られた。

また、鰯ヶ沢町の海のイメージについて質問したところ、学習前は「太陽に当たってきらきらしている。」「夕日がきれい。」などの景観についての記述や、「夏に海に入ると気持ちがいい。」「釣りをしたり砂浜で遊んだりするのが楽しいところ。」など児童の生活経験に基づいた記述が95%であった。一方、学習後には「長い間、町民が愛してきた海。」「漁港でも、七里長浜港でも、働いている人ががんばっている海。」「なくてはならない大切な海。」というように、80%の児童に本単元の学習を大観した記述が見られた。

最後に鰯ヶ沢町が好きな理由について質問したところ、「好き」と答えた理由として、学習前は「山も海もあってきれいだから。」「赤石川には金あゆがいるから。」「白神山地からおいしい水が流れているから。」といった自然の美しさ・豊かさであったり、「困っていると声をかけてくれる人がいる。」「町の人が見えて、あいさつがきもちいい町だから。」「お祭りがたくさんあって、みんなで楽しんでいる町だから。」のように町民の人柄の温かさであったりと現在の地域におけるよさについて挙げた児童が95%であった。一方、学習後は、漁港と七里長浜港の学習を踏まえ、85%の児童の記述には「海と一緒に生

表1 「ランキング」における意見の変化と事前の学習における共感を伴った理解の相関関係

事実認識・関係認識段階の学習後の感想		ランキングでの意見の変化		内訳(人)
鰯ヶ沢漁港の学習	七里長浜港の学習	ランキングでの選択	交流後	
共感○	共感△	漁業推進	意見の変更なし	8
共感△	共感○	七里長浜港活用	意見の変更なし	7
共感○	共感○	漁業推進／七里長浜港活用	迷い	1
共感○	共感△	七里長浜港活用	意見の変更あり	1
共感△	共感○	漁港推進	意見の変更あり	1
共感△	共感△	意見を決定できない	意見を決定できた	2

きようと話し合って、みんなで努力したり協力したりしたことがすごい。」「みんなが昔の人が作った港や文化を受け継いでいる。」というように町民の姿に誇りや愛情を示す内容が見られ、15%の児童の記述には「勉強をしてみて、自分もこれから町民として鱒ヶ沢町の伝統を守っていけるようにしたい。」「僕は自分の町の昔のことがわかって、自分でも何かできたらいいな、と思いました。」というような過去と現在と自分自身を結び付けた、すなわち意味認識の段階に到達できた内容が見られた。

以上のことから、単元の学習を通して実践してきた、地域素材の活用及び未来の町づくりについて考える場の設定は、先人の思いや願いへの共感を図りながら児童の具体的な理解を促し、児童の「生活感情や常識」を変容させるのに有効であったと言える。

## V 研究のまとめ

地域の社会的事象に進んで関わり、地域の歴史的事象を自分のこととして考えるという意味認識の段階への到達を図るためには、事実認識の段階における共感が必要であることが明らかになった。共感を伴った事実認識を図るためには、意図的・計画的な地域資源の活用が有効であった。こうした手だてを講じることによって、児童は地域の歴史的事象に対して、具体的に人々の思いや成果に触れ、共感を示しながら学習に取り組むことができた。さらには、共感を伴った理解をすることにより、地域に対する誇りや愛情を示すようになるなど、児童の「生活感情や常識」の変容が認められた。以上のように、地域資源の活用は共感を伴った事実認識の段階に到達するためには有効な手だてであるという結論に至った。

意味認識の段階に到達させるための手だてとして、未来を考える場を設定し、「ランキング」を行った。この活動では、自分なりに意味付けしながら未来の町づくりについて意志決定することを通して、それまでの学習を振り返ることにつながった。また、交流活動において異なる意見に触れることで、考えを広げたり深めたりする効果が認められた。さらに、それまで関係認識の段階に到達できなかった児童も、交流活動を通して、関係認識の段階を経て意味認識の段階に到達することができた。つまり、未来を考える場の設定及び「ランキング」は、意味認識の段階への到達のために効果的な手だてであるという結論に至った。

これらのことから、地域の歴史的事象を初めて学習する児童に対して、認識の段階に応じた単元構成を工夫し、地域資源の意図的・計画的な活用を図るという手だては、地域の社会的事象に進んで関わろうとする態度の育成を図る上で有効である、という結論に達した。

## VI 本研究における課題

過去と現在を結び付けて思考することを目標とした関係認識の段階では、現在の漁業に関する話題の提供が中心に展開されたために、現在の漁業に対する事実認識に偏ってしまい、関係認識の段階への到達が十分ではなかった。児童と教材の関わりについて、より深い教材研究の必要性を感じた。

### (引用文献)

- 1 中央教育審議会 2008 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）』 p. 80
- 2 宮原武夫 1998 『子どもは歴史をどう学ぶか』 青木書店 p. 336

### (参考文献)

- 青森県総合学校教育センター 2008 『研究紀要』  
岩田一彦 1994 『社会科授業研究の理論』 明治図書  
上條晴夫・江間史明 2005 『ワークショップ型授業で社会科が変わる 小学校』 図書文化  
北俊夫 1996 『「生きる力を育てる」社会科授業』 明治図書  
名雪清治・藤岡信勝 1989 『社会科で「地域」を教える 往復書簡による授業研究』 明治図書  
平田嘉三、社会科地域学習研究会編著 1980 『社会科地域学習の授業モデル』 明治図書  
文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 社会編（平成20年8月）』 東洋館出版社